

チョコレートキャッスル  
2018年1月公演

よくあるクリシエは聞きたくない

決定稿

# 人物

みきとななか  
三郷菜々香

1992.4.26 生まれ

家庭は中流階級。独断的なところがある。恋に恋している。  
園田のことが好き

はりかわ  
播川さくら

1993.1.30 生まれ

家庭は上流階級。家庭的な面と勝気な面を併せ持つ。恋は得意らしい。  
園田のことが好き  
菜々香とは幼馴染

そのだしげる  
園田 滋

1992.8.28 生まれ

母子家庭。のほほんとしている。恋って何だろう？

(中学まで)		呼ばれる側		
呼ぶ側	菜々香	あたし	さくら	園田
	さくら	菜々香	さくら	園田くん
	園田	三郷さん	播川さん	ぼく

(高校)		呼ばれる側		
呼ぶ側	菜々香	あたし	さくら	園田
	さくら	菜々香	わたし	園田くん
	園田	三郷さん	(播川さん)	ぼく

(大学以降)		呼ばれる側		
呼ぶ側	菜々香	あたし	さくら	園田
	さくら	菜々香	わたし	園田くん
	園田	三郷さん	播川さん	おれ

●開演前

着物姿の三郷菜々香と播川さくらが客入れMをマイクで歌っている。客入れMはこの二人が選曲している体。  
着物姿の園田滋が、舞台中央で菜々香とさくらのことを歯牙にもかけずに、黙々と本を読んでいる。

●開演

客入れMが途切れることなく続いていく。  
M（開演して最初のM）  
園田は相変わらず黙々と本を読んでいる。  
さくらと菜々香、ツラ側に出てきて前説をする。

○他己紹介（中3）

さくら 「大変長らくお待たせしました！ ただ今より」

さ・菜 「チョコレートキャッスル1月公演『よくあるクリシエは聞きたくない』開演  
します！！」

さくら 「早速ですが、他己紹介！」  
菜々香 「どうも皆さんこんにちは！ この子は播川さくら（さくらを紹介する）、1993年  
1月30日生まれ」

さくら 「播川さくらです、1993年1月30日生まれ、今14歳です」

菜々香 「生年月日、あたし今言ったじゃん」

さくら、（へへっ）みたいな態度。

菜々香 「さくらとあたしは同じ地区に住み、同じ幼稚園に通い、同じ小学校に通い、  
二人とも受験して、今、同じ中学校に通っている、中学3年生です」

さくら 「二人とも3年C組です」  
菜々香 「今でもよくウチに遊びに来るんだけど、お菓子作ってきてくれたり、料理振  
る舞ったりしてくれて、めっちゃ家庭的な子なんです。それに可愛いし、文武  
両道」

さくら 「やだ恥ずかしい」  
菜々香 「でも負けず嫌いなところもあって、4年生のときの運動会での50m徒競走」

S、号砲↓（3秒）↓号砲

菜々香 「あたしとほぼ同着になって。あ、でもあたしの方が早かったんですけど」  
さくら 「笑いなから）ちよつとやめてよ、その話。いつもしてるけど、それさくら全然覚えてないからね。根に持ちすぎ」

菜々香 「（無視して）それで、さくら、審判の先生にすごい抗議して、でも先生も困っちゃって。それで判定覆して、勝ちにしちやっただんです」

さくら 「全然覚えてない」

菜々香 「あんたの性格を伝えるには良いエピソードなの。はい、次さくら」

さくら 「はいはいはい（にこやかに）」

Mが変わる。

さくら 「はい、播川さくらが紹介いたしますさつきからベラベラ喋っていたこの人は、

さくらの幼馴染、三郷菜々香、中学3年生です。1992年4月26日生まれ、15歳。

さくらは柿生小学校1年2組、2年2組、3年2組、4年3組、5年4組、6年1組で、菜々香は1年2組、2年2組、3年2組、4年4組、5年4組、6年1組で」

菜々香 「そうね」

さくら 「ね、4年のときだけ違って」

菜々香 「だから4年のときの徒競走で違うレーン（走ったんだよね）」

さくら 「その話はもういいから。今はさくらのターン」

菜々香、口を尖らせる。

さくら 「で、二人とも旭中学校に進んで、さくらは1年B組、2年A組、3年C組で、

菜々香は1年C組、2年B組で」

菜々香 「つまり3年C組で初めて同じ組になったってことね（さくらに）」

さくら 「そうそう」

菜々香 「で、3年の修学旅行、舞台は金沢！ その日は21世紀美術館とか兼六園とかを見終わって、最初は」

さくら 「え？なんで金沢なのよ、何があるのよ……」

菜々香 「という気持ちだったのが」

さくら 「金沢すごいじゃん、っていうかむしろずっといたい、住みたいね」

菜々香 「っていう気分になっていた2日目の夜！ あたしたちは」

さ・菜 「こんな会話になったのでした！」

M、変化をする。

L、変化をする。

V 『恋バナ』

菜々香 「ねえ、さくら」

さくら 「なあに」

菜々香 「好きでしょ、園田」

さくら 「……へア!?(起きる)」

菜々香 「(起きながら) いやいやいやいやいや。え、好きでしょ? 好きだよね?」

さくら 「え、え、ちよ、なんで?」

菜々香 「じゃあ、あたし告っていい?」

さくら 「え、え、え……? 待って、あんたも好きなの?」

菜々香 「……『も』?」

さくら 「も」

菜々香 「え?」

さくら 「『え?』?」

菜々香 「え?」

さくら 「あ?」

菜々香 「……好き?」

さくら 「好き?」

菜々香 「好き?」

さくら 「好き?」

菜々香 「好き?」

さくら 「好き?」

菜々香 「好き?」

さくら 「好き!」

菜々香 「好き?」

さくら 「好き!」

菜々香、さくらを指して笑う。

さくらもつられて、菜々香を指して笑う。

さくら 「はめたでしょ」

菜々香、笑っている。

さくら 「はめたでしょ!」

菜々香 「勝手にはまったじゃん」

さくら 「サイッテー」

菜々香 「なんでよ」

さくら 「……好きだよ、だって3年間も（一緒のクラスなんだよ）」

菜々香 「あたしも、本当に好きなの。園田のこと」

さくら 「えええ〜」

菜々香 「無口でキホン一人でいるけどさ、そゆとこ、かっこいい。なんか、オレの道！  
みたいな感じで」

さくら 「わあ……」

菜々香 「好きだから！」

さくら 「フッ」

菜々香 「あん？」

さくら 「園田くん、チョー優しいからね、実は。さくらが体育でケガしたとき、休み

時間に誰も来てくれなかったのに、園田くんだけ来てくれて『大丈夫？』って」

菜々香 「出たあり、負けず嫌いなトコ〜」

さくら 「（立ち上がって）ちよつと待って。負けず嫌いとかじゃなくて、さくら3年間

一緒だからね！ 菜々香今年だけじゃん」

菜々香 「は？ 年数なんて関係ないから！ あたしの方が絶対好き。すごい良い匂い

するし字い綺麗だし、食べ方綺麗だし、好きな本ナントカってんだよ！ チョ

ー文学的」

さくら 『『智恵子抄』だよ（ドヤ顔）』

菜々香 「……（悔しそうに）なんで知ってるのよ」

さくら 「3年間いっしょですから（得意そう）」

菜々香 「とにかく！ あたし、明日告るから！ 先に言っておくね、告るから！」

さくら 「ズルい！ さくらの方が先に好きだったんだけど！」

菜々香 「関係ない！ 早い者勝ちだから」

さくら 「じゃあ、さくらも告る」

菜々香 「ちよつとパクんないでよ！」

さくら 「さくらの方が早く告るから！ 菜々香がパクリだよ」

菜々香 「は？ なにそれあり得ない」

さくら 「あ、さくらケータイの番号教えようつと」

菜々香 「ズルい！！ 自分だけ持ってるっからって」

さくら 「早い者勝ちなんでしょう〜？ 菜々香も買ってもらえばいいじゃん！」

菜々香 「は——マジであり得ない」

さくら 「あり得るし」

菜々香 「絶対あたしが告る」

さくら 「あり得ないんですけど」

菜々香 「ですけどじゃないんですけど〜」

さくら 「ですけどなんですけど〜」

菜々香 「はああくケータイ持ってるからって調子に」

菜々香とさくら、そんな感じで言い合う。

先生の声 『うるさい！ いつまで起きてるの！ 早く寝なさい！！』

さくら 「やばー！」

菜々香 「川原キタ！」

さくら 「もう寝よ」

菜々香 「やばいやばい」

M、変化をする。

菜々香とさくら、その場で寝る。わざとらしく「ぐーぐー」

V 『修学旅行3日目』

V 『二人とも告ったみたいです』

### ○園田、告られる(中3)

園田、本を読みながら

園田 「あ、件の園田です。……園田滋と申します。はい、三郷さんや播川さんと同じ、旭中学校3年C組です。あ、これ？(読んでいる本)これは……『智恵子抄』ですよ、ぼくのお気に入りの一冊です」

V 『告白されましたか?』

園田 「告白……というかどうか。『好きです』のようなことを直接的に言われたわけではないので……。修学旅行中で衆人環視と言いますか、周りにほかのクラスメイトもいましたので、そうですね、告白と言いますか、告白予告と言いますか……まあですので、実質告白になるんでしょうか。なにぶん自分も『告白をされる』という経験が初めて……です。でもぼくも正直しどろもどろだったというか」

V 『修学旅行から帰ってきて』

園田、勢いよく立ち上がり

園田 「それからはもう、二人して、躍起になったみたいなのに、その、いわゆる告白をしてくるんです！」

菜々香とさくら、起き上がり、園田の周りを回りながら。

園田は、再び本を読みだす。

菜々香

「あたし、園田のことが好きです！ 1学期、最初の席のことを覚えていますか。あたしと園田、隣になって、じゃあまず隣同士自己紹介しましょうってとき、『ぼく、ハリネズミを飼っているんです』って。そのときの声が、もう本当にタイプで……。声が……。あ、もう声じゃなくても全部好きです、性格も。しかもそのハリネズミの名前がコウタロウって」

さくら

「園田くん、わたし播川さくらって言います。3年間一緒だったの、覚えててくれるかな。あんまりさくら、園田くんに話しかけたことないし、そんなにさくら存在感ないから覚えていてくれるか分からないけど、でも、でもでもでも、でも3年前からずっと好きです！ 本をいつも読んでいて、『どんな本読んでるの？』って川島くんたちと話していたのを小耳に挟んだの。『智恵子抄』とか『暗夜行路』とか『蒲団』とかムスカしい本読んでるって言うってたけど、川島くんたちは『ナニソレ』って感じだったけど、でもバカにするでもガツカリするでもなく（次のセリフを続ける）」

菜々香

「あたしはさくらより園田と一緒にいる時間は短いけど、本当に好きです！ 恥ずかしいけど、こんなふうに好きだなあ、って思えるのは初めてで。ああああああああっていうかこんなことを話すのも恥ずかしいんだけど、もしよかったら、あたしと付き合ってください！（次のセリフを続ける）」

さくら

「さくらに優しくしてくれるのも、とても嬉しいです！ 優しくしてくれる男子は、その、いるんだけどみんなイヤラシイ感じがして。でも園田くんは本当に親切だと思ったの。体育でケガしたとき来てくれたの、本当に嬉しかった（次のセリフを続ける）」

菜々香

「まだまだあたしのこと知らないかもしれないけど、園田のことが本当に好きです。さくらと比べたらそりゃ、いろいろダメなところあるかもしれないけどさ、でも伸びしろはあるってことじゃない！？ 伸びしろによきによき！ 付き合ってください！」

さくら

「園田くんは甘いもの好き？ クッキーとかマドレーヌとかパウンドケーキとか、さくら焼けるよ！ あ、甘いものじゃなくても、肉じゃがとか、ベタかな……。ええと園田くんは、何が好きなのかな？？」

菜々香

「あたしと付き合ってください！」

さくら

「付き合ってください！」

菜々香

「付き合ってください！！」

さくら

「付き合ってください！！」

菜々香

「ねえ、園田！」



さくら 「園田くん！」

菜々香 「園田！！」

さくら 「園田くん！！ さくら、園田くんのために（なんでもするよ）」

菜々香 「お願いします！」

さくら 「ああああ！ さくら料理以外も裁縫とかお掃除も好きで」

菜々香 「さくらああああああ！ 家庭的アピールうううう」

さくら 「（我関せず）あと、ケータイの番号、交換しよ！ ね！ 赤外線！（ガラケーを取り出す）」

菜々香 「ケータイズルい！」

さくら 「ね、ね??」

菜々香 「さくら！！」

さくら 「ケータイ！ 赤外線！ ほら、ほら！」

菜々香、体を園田にくっつけて

菜々香 「園田くん、あたしのほうが、いいでしょ？」

と、ちよつと着物をはだけさせる。

さくら 「あああああ！ 色仕掛けなんてサイッアク！！」

菜々香 「（あっかんべえ）さくらだってメアド聞こうとしてるじゃん」

さくら 「それ色仕掛けじゃないもん、さくらはケータイ持つてるから」

菜々香 「じゃあこれだっていいっしょ」

さくら 「はああ〜？ 意味わかんない！」

と、園田に体をもっとくっつける。

さくら 「ちよつと、離れなさいよ！」

菜々香 「は、いやだし」

さくら 「なんでよ〜！」

菜々香 「だって好きだもん！」

さくらと菜々香、言い合う。

園田、菜々香に目をやって

園田 「えと……なに？」

さくら 「離れなさいってばあ！ いつまでそう（してるのよ）」

園田、耳栓を外す。

菜々香、園田から体を離す。  
さくら、黙る。

菜々香・さくら 「え？」

園田 「え??? どうしたの」

さくら 「いや、ええと、その(菜々香を見る)」

園田 「あ、ごめん……えと、なんか言ってた？」

さくら 「え？」

園田 「本読んで、全然、聞いてなかった」

菜々香 「え……？」

園田 「もしかして、ぼくに何か話しかけてた？」

さくら 「え。ってことは、さくらの聞いてなかった……？」

園田 「ごめん……、ぼくに用があった、ってこと……？」

さくら 「用っていうか、ええと(菜々香を見る)」

菜々香 「(すかさず) はい！ 好きですー！！」

さくら 「あ、ズルい！ さくらもー！！」

園田 「え? え? え???」

菜々香 「あたし、園田のこと好き！ だから付き合って！！(手を出す)」

さくら 「あああああ！！！！ 菜々香ああああ。さくらも好きです、付き合っってください

い(手を出す)」

園田 「えええええ???」

さくら 「あ、園田くん！ ケータイケータイ！ 赤外線赤外線！」

と、ケータイを取り出す。赤外線を送る動き。

菜々香 「あ！ ズルい！(電波を妨害する動き)」

さくら 「メアド、交換してください！」

園田 「ごめん、ぼくまだケータイ持ってなくて」

さくら 「えええええ！！(崩れ落ちる)」

菜々香 「っしやああ！！(ガッツポーズ)」

菜々香、気合を入れて園田の元へ。

菜々香

「あたし、あたし、3年で同じクラスになってから、園田のことがずっと好きです。毎日園田のことばかり考えています。不束者ですが、あたしと付き合ってください！(手を差し出す)」

M、カーペンターズ『青春の輝き』  
L、変化する。

園田、立ち上がる。

園田 「ぼく、……恋愛とか好きっていうことがよく分からないです」

さくら 「なによそれ（立ち上がる）」

菜々香 「いいよ！」

さくら負けじと園田に近づこうとするが、菜々香が物理的にディフェンスをするのでさくらは近づけない。

さくら 「ちよ、ちよ、えええ？ 嘘でしょ？」

菜々香 「さくらをディフェンスしながら）あたしと一緒に、勉強していこう、恋！」

園田 「さくらのことは気にしない）え」

菜々香 「あたしが、きつと園田をあたしにメロメロにさせるから」

さくら 「は？ なにそれ！ 意味分からないんだけど！ ねえ園田くん、菜々香よりさくらのほうが」

菜々香、さくらの口を塞ぐ。

さくら、モゴモゴ。

園田 「ぼく、三郷さんのことちゃんと好きになれるかどうか分からないし、付き合いつて三郷さんが楽しいかどうかなんて」

菜々香 「絶対楽しい！ 絶対好きにさせるし、何よりあたしが園田くん好き！ だから大丈夫！（？）」

園田 「……………そっか。そこまで言ってくれるなら、嬉しいな。ぼくで良ければ、よろしくお願いします（ぺこり）」

さくら、崩れ落ちる（正座）。

菜々香 「え、いいの……？」

園田 「うん」

菜々香 「……………っしやあ！！（ガッツポーズ） ありがとう園田、よろしくね！」

菜々香、ハグ&キスの体勢。

園田 「じゃあ、また、明日」

園田、ハケる。

取り残される菜々香（ハグ&キス）、さくら（崩れ落ち）

菜々香 「あれ……あれあれあれ??？」  
さくら 「ぐやじいじいじい」  
菜々香 「バイバイのハグは?? またねのチューは??」  
さくら 「なんで、なんでよおおおおお」

菜々香、ハケに向かって投げキッス（4回）。

菜々香 「園田くく またねくく…… 明日学校でくく（追うようにハケて）ってか、

あたしたち付き合った、で間違いないよね？」

園田が遠方で「うん」と言う。

さくら、菜々香がハケたら起き上がる。

さくら 「もうなんなのよ！」

菜々香、戻って来る。

### 〇ゆめゆめ（中3）

菜々香 「もういなくなってた」

さくら 「ふうん。そ」

菜々香 「なに」

さくら 「なにが」

菜々香 「その……」

菜々香、「園田のこと」を意図し、ハケを指す。

さくら 「よかったじゃない、付き合えて」

菜々香 「うん」

さくら 「さくらもう帰るね」

さくら、ハケようとす。

菜々香、さくらがハケかけるときに

菜々香 「ごめん」

さくら 「……なに、なんで謝るの」

菜々香 「なんで、って」

さくら 「わたし、まだ園田くんのこと諦めてないから」

菜々香 「!？」

さくら 「当然でしょ？ 菜々香と園田くんが付き合ったくらいじゃ、『好き』の気持ち消えないし、むしろ全然好きだもん。ってか、園田くん、菜々香のことちゃんと好きになれるか分からない、って言ってたよね。わたしにもまだチャンスはあるってことでしょ」

さくら、ハケる。

菜々香、さくらを目で追う。

さくら、ハケから戻って来て

さくら 「さくら負けたつもり全然ないし。ゆめゆめご油断なさらぬよう。んふっ」

さくら、ハケる。

菜々香 「(客席を見つめて) ワアーオ……」

L、艶めかしく変化する。

M、久保田利伸『LA・LA・LA LOVE SONG』

Olalala love song (中3)

園田、イスを持って来る。

園田 「息がとまるくらいの 甘いくちづけをしようよ ひと言もいらぬさ とびきりの今を 勇気をくれた君に 照れてる場合じゃないから 言葉よりも本気な LA・LA..LOVE SONG」

園田と菜々香が中央机でイチヤイチャしようとしている。

さくらがやってくる。慌ててハケに身を隠し、一目散で対面のハケへ。

さくら、ハケる。

M、F O

菜々香 「ごめん滋くん、きょうはあたし、美樹たちと遊んでくるね」

園田 「うん、わかった」

菜々香 「また、学校でね」

菜々香、投げキッスしてハケる。

園田、控えめに手を振る。菜々香がハケたらごく控えめに投げキッス。

菜々香、それを見てちよっとハケから顔を出して興奮する。

○ちくらの来訪（中3）

菜々香が本格的にハケると本を読み始める。  
さくら、園田に近づいて

さくら 「園田くん」

園田 「（さくらを見て）！ 播川さん」

さくら 「園田くんのウチに行きたい」

園田 「！？」

さくら 「今、何月？」

園田 「？？？」

さくら 「そうだね、1月だよね」

園田 「え、と……ぼく」

さくら 「もう時間がありません。いくら中高一貫で高校受験がないとはいえ、高校生になるとまずクラスが変わります。わたしだけクラスが別、みたいなこともあるかもしれませんが。高校編入組もいますね。ライバルが増えるかと思うともう、気が気じゃありません。なので、ここからは、もう菜々香に遠慮しないでいいかな？」

園田 「え、と」

さくら 「というわけで、園田くんのウチに行きたい。いや、行く」

園田 「……圧が、すごいね」

さくら 「アツガ？（頭の中で漢字変換されない）」

園田 「ウチに来て、どうするの？」

さくら 「決まってるでしょ」

園田 「へ？」

さくら 「コウタロウに会いに行く」

園田 「誰！？ あ、ウチのハリネズミ！」

L、変化をする。

M、Tia『好き好きゲーム』

園田、ハケてカップを取りに行く。

さくら 「（コウタロウを見ている体で）か〜〜わいいいい……………」

園田 「でしょ？」

さくら 「お〜よちよちよち〜」

園田、さくらに近づく。

園田 「コウタロウも播川さんが来て嬉しそうだね」

さくら 「もう〜照れる！（叩く）」

園田 「いてっ」

さくら 「あゴメンなさい」

ふと、さくらと園田の視線が合う。

さくら、キュン。

園田 「なに？」

さくら 「い、いや……（慌てて視線をコウタロウに戻し）あ、あああ、なんでコウ

タロウってコウタロウって言うの？」

園田、少し考えるしぐさ。

さくら 「ん？」

園田 「それ、初めて聞かれたなあと思って」

さくら 「そうなんだ」

園田 「そもそも友達がウチに来たことがほとんどないなあ。コウタロウがウチに来たのも1年くらい前でね。名前の由来って友達に喋ったことない。播川さんが初めて」

さくら、恥ずかしくなり目を逸らす。

園田 「ぼくが高村光太郎が好きだから」

さくら 「あ！ 『智恵子抄』！」

園田 「そう！ よく覚えてるね」

さくら 「まあね」

園田 「……ってまあ、コウタロウの由来はそれだけだけどね。ああ！ でもこの話にはオチがあって、今年の頭に、コウタロウが物を全然食べなくなってきたに獣医さんに診てもらったの。そしたら、オスだと思っていたのがメスで！ コウタロウ、おまえ、メスだったのかって！ でも、1年くらいコウタロウって呼んでたから、今さらチエコって呼ぶのには……。ああ、智恵子っていうのは高村光太郎の奥さんで、だから『智恵子抄』ってのは光太郎が智恵子のことを書いた詩なんだけど、智恵子は最期服毒自殺をしちゃって」

さくら、ぽかーんとしている。

園田 「ああああああ、ごめんねこんな話。つまんないよね」

さくら 「（首を大きく横に振って）ううん、全然そんなことない。もっとして」

S、(園田の) 空腹の音。

園田 「(恥ずかしそうに) ……お腹減ったね」

さくら 「あ、じゃあさくらなんか作る！ 料理、得意なの。こう見えて」

園田 「え、でもそれは」

さくら 「ホントに得意だから！ 任せて！ なんでも作れるよ！！ おかあ……両親にも妹にも『おいしい』って言われてるし、大丈夫だから！ ね、ね！ 本当だよ！！ さくら本当に、料理は(圧)」

園田 「……じゃあ、そんなに言うなら、お願いします(ぺこり)」

さくら、園田が頭を下げている間にガッツポーズ。

園田 「(ハケを指で示しながら)キッチンにある調理器具と冷蔵庫の中のものは何でも使っているから」

さくら 「はあい」

さくら、ハケる。

さくらの声「わ！ すごおい！ グリル……これ深い！ 使いやすそう！」

園田、イス2脚を中央机に寄せる。

さくらが、皿を2枚持って出てくる。

さくら 「お待たせしました」

園田 「早いね」

さくら 「でしょ？ (皿を中央机に置く) 料理人の腕、腕」

園田 「(見てない) はは」

さくら、しょんぼり。

園田、座る。

さくら、園田に次いで座る。

園田 「でもホント、ありがとう……。こんなおいしそうなグラタン」

さくら 「あ、ドリア……」

園田 「ドリア！」

さくら 「うん、ドリア……」

園田 「あ！ でも本当に美味しそう」

さくら 「とんでもない！ こんなんでよければ、(勇気を召喚) い、い、いつでも作るからさ。呼んでよ！ また！」



園田 「事もなげに」 うん、そうするね」

さくら、嬉しさのあまり、強めのガッツポーズ。

園田、「うん、美味しい、美味しい」と言いながらバクバク食べている。

さくら、愛おしそうに見守りつつ、自分も食べる。

さくら 「ねえ、ねえねえねえねえ」

園田 「(食べるのに夢中)」

さくら 「ねえねえねえねえ」

園田 「うまいうまい」

さくら 「ねえねえねえねえ (叩く)」

園田 「ゴホッ (噎せる)」

さくら 「大丈夫!？」

園田 「(飲み物を飲んで) ごめん……大丈夫。どうしたの？」

さくら 「え?」

園田 「ねえねえって」

さくら 「ああ、実は一つ報告があって」

園田 「報告?」

さくら 「わたくし播川さくら! 今日1月30日! 誕生日です」

園田 「……おめ(でとう)」

さくら 「なので、プレゼントがあります!!」

園田 「はい。……はい??」

さくら、ポケットから紙を出し

園田 「逆に!？」

さくら 「受け取ってください! (差し出す)」

園田 「これは」

さくら 「さくらの連絡先です!!」

園田 「……え、でもぼくまだケータイ(持ってないよ)」

さくら 「いいの! 知ってる! でも、いざれ園田くんがケータイを持ったそのとき

に、さくらのケ、ケータイの番号を、い、い、一番に登録してもらいたくて!」

園田 「(気圧されて) わ、わ、分かりましたああああ。つ、つ、つ、謹んでお受け

いたします(恭しく受け取り、手帳にしまう)」

L、変化をする。

園田、皿を持ってハケる。

菜々香、出てくる。

○卒業式（中3）

先生の声 『只今より、平成19年度卒業証書授与式を執り行います。卒業生、起立。礼』

菜々香、さくら、礼をする。

菜々香、園田を探してキョロキョロする。不安そうな顔。

さくら、菜々香をたしなめる。

M、『蛍の光』（合唱、ピアノ伴奏）

先生の声 『在校生、起立。卒業生が順次退場します。保護者の皆さま、在校生、先生方はどうぞ拍手でお見送りください』

S、拍手。

さくら・菜々香 「いつしか年もすぎの戸を明けてぞ今朝は別れ行く」

L、変化

M、『蛍の光』FO。

S、火事

さくら、ハケる。

V 『2008年3月19日（水）』

V 『旭中学校卒業式』

V 『園田滋は欠席した』

V 『春休み』

S、飛行機の離陸する音。

○春休み・美樹との電話（中3↓高1）

S、固定電話の音。

菜々香、マンガを読んでいる。

菜々香、電話の呼び出し音に反応して起きる。

菜々香 「お母さん、電話……。……。いないのか」

菜々香、電話に出に行く。

菜々香 「もしもし、三郷ですが」

V 『菜々香?』

菜々香 「あ、美樹?」



V 『』

菜々香 「!? これ電話だよね」

V 『うん』

菜々香 「何それ」

V 『スタンプ』

菜々香 「スタンプ!? え、ハンコみたいなの?」

V 『ちよつと何言ってるか分かんない』

菜々香 「なんでよ! まあいいや。で、なに」

V 『今度の日曜ひまンモス?』

菜々香 「日曜? 23日?」



V 『』

菜々香 「だからそれ!! なに! 誰!」

V 『気にすんな。日曜暇ンモスなの?』

菜々香 「え〜、まあ、たぶん、暇ンモス」

V 『お、やった！ じゃあ遊び行かないモスカ？』

菜々香 「いいよ。どこ行くモス？」

V 『上野の大恐竜展モス』

菜々香 「(諸手を挙げて) マンモー―ス！」

V 『お、おう……』

V 『さくらも呼ぶ？』

菜々香 「ああ。さくらはいないよ」

V 『いない？』

菜々香 「うん、播川家は毎年春休みは家族で海外旅行さます」

V 『そうなんだ！ すごーい』

菜々香 「ざますねえ」

V 『……………』

菜々香 「どうしたざますか」

V 『じゃあ、この話していいざますかね』

V 『……………』

V 『……………』

V 『……………』

V 『……………』

菜々香 「え……………(愕然)」

さくらが颯爽とやって来て、中央机に座る。

○爆弾(高1)

さくら 「おはよう！ おはよう！ おはよう！」

と、教室を廻る。

V 『2008年4月』

V 『旭高等学校』

V 『菜々香、さくら 高校1年生』

S、教室の喧騒

菜々香、さくらにもものすごい剣幕で詰め寄る。

さくら 「菜々香、久しぶり〜！（鞆をゴソゴソ）」

菜々香 「……ねえ」

さくら 「はいこれ（渡す）」

菜々香 「なにこれ（受け取る）」

さくら 「パレスチナ土産」

菜々香 「ありがとう。……ぱれすちな！？」

さくら 「うん……春休みだったから」

菜々香 「パレスチナってわざわざ旅行するほどのところ！？」

さくら 「もうすごかった。紛争が」

菜々香 「でしょうよ！」

さくら 「ホントにクレイジージャーニーみたいだった」

菜々香 「なにそれ」

さくら 「知らない？ テレビば（んぐみ）、あ」

菜々香 「さつきからちよいちよい未来の松本人志の影が（振り払う）」

さくら 「何言ってるの」

菜々香 「今、2008年だから！ ところでこれなに」

さくら 「爆弾落ちてた」

菜々香 「爆弾！？」

菜々香、慌てる。

さくら 「お土産用のね。中チョコだよ。おはよう〜」

菜々香 「ねえ！ 真面目に聞いて！」

さくら 「何よ。あたしはいつだってマジメだよ」

菜々香 「滋くんの家！ 火事になったんでしょ！？」

さくら 「……なにそれ」

菜々香 「なにそれ、じゃなくて」  
さくら 「え、だって、え??? 園田くんち？」  
菜々香 「知ってたでしょ？」

さくら、(ん?) みたいな顔。

菜々香 「知・っ・て・た・ろ!？」

さくら、爆弾に近づき

さくら 「ばーーん」

間

菜々香 「(爆弾を落とす) 滋くんの家、家事になった……。知ってたでしょ？」

さくら 「園田くんちが、火事になった(オウム返し)」

菜々香 「……そうだよ」

さくら 「そ、か。そ〜、うん」

菜々香 「卒業式の日に滋くんちに火事が起こった。それで卒業式に来られなかった。

そのまま一家で、親族のいる北海道へ移って、その高校に通うことになった  
……」

さくら 「……みたいだね。で？」

菜々香 「は？」

さくら 「何でそれをわたしに言うの？」

菜々香 「はあ？」

さくら 「園田くんちの火災のことは知ってた。それでなんで菜々香がわたしに怒って  
るの？」

菜々香 「あんたねえ……」

さくら 「恋人が北海道に引っ越しちゃって寂しいよう、ってこと？」

菜々香、机を叩く。

菜々香 「あんたが!! あんたが、火事を起こしたんじゃないの?!！」

さくら、周りを気にして立ち上がり

さくら 「ちよっと……ちよっと何言ってるの? やめてよ」

菜々香 「なんで? あんたが起こしたんでしょ？」

さくら 「なにそれ? なんなの? なんなのいきなり」

菜々香 「聞いたから」

さくら 「何を、誰に……？」

菜々香 「それは……言えない」

さくら 「なにそれ」

菜々香 「でも！ あんたが火事を起こしたんじゃないかって」

さくら 「やめてって、そんな言いがかり！ そんなことあり得ないから！！ そうじやないって、……言われたんだから」

さくら、座り込む。

菜々香 「……なに、『言われた』って、誰に？ 何を？」

さくら、黙っている。

菜々香 「あたしさあ、知らなかったよ。さくらが滋くんちに通ってるなんて……。それで、料理とか作ってたんだってね??」

さくら、黙っている。

菜々香 「ひとの彼氏にさ、幼稚園のときからずっと一緒だった友達の……あたしはさくらのこと親友だって思ってた。思ってたよ！ その親友の彼氏に手え出すってどういうこと？ 確かに滋くん『まだあたしのことちゃんと好きになれるか分からない』って言ってたよ最初は。でも付き合ってたんだよ、あたしたちは。なんでそれなのに、勝手に盗ろうとしていくのよお！」

さくら 「(鼻で笑って) ほおら、言わんこっちゃない」

菜々香 「はあ？」

さくら 「わたし言ったよね、『あきらめないよ』って。『油断しないでね』って。わたしは園田くんは何しようとなつたの勝手でしょ！？ しかもわたしは友達として、あくまで友達として園田くんの家に行ったの。友達の家に行って何が悪いの？ それでわたしは料理が得意だから振る舞っただけ」

菜々香、さくらをビンタする。

さくら 「いったあい」

菜々香 「最っ低」

さくら 「殴ったあなたに言われたくない」

菜々香 「……」

さくら 「まあいいや。じゃ、最低ついでに言っておくけど、知っていたらごめんね。

わたしはね、1月から3月まで、毎週火曜日と金曜日の週2回、園田くんちに

菜々香  
さくら  
菜々香  
さくら  
「行ってご飯を作ってた！ どうして分かる？ 園田くんち、母子家庭なの。お母さん、火曜日と金曜日は仕事が遅くなることが多いんだって。それで園田くんはいつもスーパーの見切り弁当。だからわたしが作ってあげることにしたの。そしたら美味しい美味いって。また来てほしいって。簡単な料理だったけどすごくおいしそうに食べてくれたの。わたし、今だから言うけど菜々香よりよっぽど園田くんの恋人だったと思う」  
「……（小声でぼそぼそと）あんたが、やっぱりあんたが火事起こしたんだ」  
「なに？」  
「あんたが火事を起こしたんでしょ！！！」  
「わたしは火事起こしてないって、さつきも言ったでしょ」

間

菜々香  
さくら  
菜々香  
さくら  
菜々香  
さくら  
「……さくら」  
「なに？」  
「どうして周りに言っちゃうの？」  
「なんのこと？」  
『わたしは園田くんちに行っています。この間はキッシュを焼いて、ブリの照り焼きを作りました』とか『園田くんが料理作るの手伝ってくれた』とか、なんで友達に言っちゃうの？ 狭い学校なんだからさ、そのことがあたしの耳に入ってくるとは考えないの？ ってか現に入ってきたし。そしたらあたしがどう思うか、とか考えるでしょフツ」  
「……」

菜々香  
さくら  
「美樹言ってたよ！！ 卒業式の前日も、あんた滋くんち行って、料理振る舞ったんでしょ。……火事の、**火の出どころは、キッチン**らしいってことも」

菜々香  
さくら  
「！？ え……知らないそんなの」  
「さくら言ってたよね！！ 火曜日と金曜日はお母さんが帰ってくるのが遅いって。卒業式は3月19日……水曜日だった。……あたし、滋くんのこと好きだからよく見てただけど、お弁当持ってきていた日は一日もなかった。それが母子家庭でお母さんが忙しいから、ってことは知らなかったけど。あと、知ってた？ 滋くん朝ご飯食べないんだって。『なんで？』って聞いたら、ちよっと笑って『朝は家族がみんな忙しいから食べない』って」

さくら  
菜々香  
「何が言いたいの？」  
「火曜日にさくらが滋くんの家で料理をした。火曜日仕事で遅く帰ってきた滋くんのお母さんが料理するとも思えないし、お弁当持って来てなかったってことは、朝も、きつとお母さんは料理してなかったんだと思う。……だから、卒業式……水曜日に家が火事になるとしたら、その出火原因がキッチンにあるんならさあ」

さくら  
「……」



菜々香 「さくらが原因としか考えられないじゃん!!!!!!」

さくら 「違う!!!!!! 違うの!!!!!! わたしはやってない」

菜々香 「だって、火曜日の夜にキッチンを使ったのはさくらだけ」

さくら 「(大きくかぶりを振って) 違う」

菜々香 「さくら……」

さくら 「言われたんだってば、園田くんから」

菜々香 「え?」

さくら 「園田くん本人から、『播川さんのせいじゃない』って言われたの」

菜々香 「え……。なんで……。いつ? どういうこと?」

さくら 「わたし、園田くんに電話番号とメールアドレスを教えたの。電話、かかってきた」

菜々香 「そんな……なんで……。だってあたしには何も」

さくら 「連絡網とか全部燃えちゃったんだって。でもわたしがあげたメモは、手帳に

しまっていてずっと持ってたって」

菜々香 「いつあったの……電話」

さくら 「3月……24日。留守録に残ってた。『園田です。これ聞いたら折り返してく

れると嬉しいです』って」

菜々香 「折り返したの?」

さくら 「うん。だから、話したのは3日前。そのときに初めて、園田くんが卒業式を

休んだ理由を知った。でも出火がキッチンのことなんてわたしは知らなかつ

た! ホントよ! 火事のこととは知ってたけど、キッチンから出火したなんて

一言も言っていなかった。それに『大丈夫なの??』って聞いたたら、とにかく『播

川さんは関係ない、播川さんは関係ない』って言ってくれて」

「違う」

「え?」

菜々香 「それは優しさだよ。滋くんの。『火事を起こしたのはさくらだ』なんて、仮に

本当でも言うわけない」

さくら 「そんな……だって、だって。そんなわけないんだって。さくらはただ園田く

んのための思っで料理しに行っただけで、」

「さくら」

さくら 「園田くんが、『播川さんじゃない。播川さんは関係ない』って、園田くんが」

「さくら」

さくら 「それにキッチンで出火したなんて、一言も言っていなかった」

「さくら!!!!!!」

「え……?」

菜々香 「それは美樹から聞いたんだよ。美樹、小学校から滋くんと同じで家も近かつ

たし、確かな情報だと思う。キッチンが出火場所だって言わなかったのはさ、

それも、優しさなんじゃないの」

「そんな、そんな……嘘、嘘でしょ……」

菜々香 「さくらの料理が原因で、出火場所がキッチンだから、言わな……言えなかつ

たんじやないのかな。本当のこと。さくらを、傷つけないために」  
さくら 「顔を押しさえて」嘘……そんな、嘘……嘘。ごめんなさい」

L、溶暗

○新千歳空港（大1）

V 『それ以降——』  
V 『播川さくらはしばらく学校を休んだ』  
V 『2学期には登校するようになったが』  
V 『それでも三郷菜々香とは』  
V 『以前のように親しくすることはなかった』  
V 『二人は事実上』  
V 『絶縁状態になった』  
V 『それは二人が高校生になっても』  
V 『変わることはなく』  
V 『時は流れ——』  
V 『2011年3月 新千歳空港』

S、空港の音。

S、スーツ姿、大荷物の園田、出てくる。

園田 「ここまでお見送りありがとうございます(ぺこり)。家に着いたら連絡します」

V 『大丈夫……?』

園田 「なにが?」

V 『東京での生活』

V 『うまくやっていける?』

園田 「大丈夫だよ。もう18歳なんだから」

V 『ちゃんとご飯は食べて』

園田 「食べる、食べます」

V 『たまには帰ってきなさいよ』

V 『せめて連絡寄越すとか』

園田 「たまには、帰りますよ。盆と年末年始くらいは」

V 『そうしてね』

V 『何もなくても、帰って来てもいいんだからね』

園田 「はい」

アナウンス 「全日空からの出発便のご案内をいたします。全日空東京行き、9時30分発、

256便はただ今より搭乗を開始いたします。(当便をご利用になるお客様は24番

ゲートにお進みください)」

園田 「では、行ってきます。みんな、元気で(ぺこり)」

V 『気をつけてね——』

園田、中央机に座る。

L、変化をする。

S、飛行中の音

CA

「みなさま、当機は羽田空港に着陸いたしました。当機はしばらく滑走を続けますが、安全のため機体が完全に停止し、ベルト着用のサインが消えるまでお座席に着いたままお待ちください。ただ今の時刻は午前11時3分、天気は曇り、気温は11度でございます」

園田、立ち上がる。

園田 「久しぶりです、東京(ぺこり)」

園田、ハケる。

スーツ姿のさくら、出てくる(胸には名札)。中央机へ。

○さくらと園田の再会@パン屋(大1)

S、入店音

M、BGM

さくら 「いらっしやいませ。ポイントカードはお持ちですか? ……失礼いたしました

た。……5点で960円になります。ありがとうございました」

園田、やって来る。お盆とトングを持っている。一周する。

さくら 「只今メロンパン焼き立てでございます。どうぞご利用ください」

園田 「お盆とトングを出してを出して」 お願ひします」

さくら 「いらっしやいませ。メロンパン1点、チョコリソードツグ1点、ごぼうパン1点、合計450円になります」

園田 「(財布を開けかけて、万券しかない) ああ……すみません(出す)」

さくら 「いえいえ」

と、お金を渡して、ふと、目が合う。

さくら 「あ」

園田 「あ」

園田、名札をまじまじと見る。

さくら 「近い近い(恥ずかしがる)」

園田 「やっぱそうですよね!!」

さくら 「そうそうそう、うんうん」

園田 「うんうんうん」

さくら 「そうそうそうそう」

園田 「うんうんうんうん」

さくら 「そうそうそうそう」

園田 「うんうんうんうん」

さくら 「そうそうそうそう」

L、変化をする。

V 『2011年4月15日(金)』

V 『園田滋 18歳 播川さくら 18歳』

### ○さくらと園田の再会@カフェ(大1)

園田とさくら、中央機の両端にイスを持ってきて座る。

さくら 「久しぶりだね」

園田 「うん、ご無沙汰しています」  
さくら 「東京、来てたんだね」  
園田 「うん。3月末に」  
さくら 「そっか。大学……だよね？」  
園田 「うん」  
さくら 「この辺なの？」  
園田 「明京の、経済」  
さくら 「え、嘘、明京！？ わたしと一緒に！」  
園田 「え？」  
さくら 「わたしも、明京！ ああ、学部は文学部だけど」  
園田 「そうなんだ……！すごい偶然。じゃあ同じキャンパスにはいたんだ」  
さくら 「そうだねえ」  
園田 「気づかなかった」  
さくら 「いっぱいいるからね、ひと」  
園田 「うん」

間

園田 「あの、三郷さんは……？」  
さくら 「えと」  
園田 「元気にしてる？」  
さくら 「……………」  
園田 「播川さん……？」  
さくら 「あの、実は……分からないの」  
園田 「え？」  
さくら 「連絡先もわからないし、もうずっと連絡取ってない」  
園田 「え……………」  
さくら 「ごめんなさい、だから菜々香のことはわたしも分からない」  
園田 「……それはやっぱり、おれの家の、火事のせい……………」

さくら、否定も肯定もしない。

園田 「ごめんなさい」  
さくら 「え、なんで」  
園田 「おれが播川さんと三郷さんを」  
さくら 「そんなことない！それは違う」  
園田 「でも」  
さくら 「わたしあのあと！ 菜々香と喧嘩して、学校に行けなくなっちゃったの……。しばらく誰とも話せなくなつて、引きこもりみたいだった」

園田 「……」

さくら

「だから園田くんにも電話できなかった。正直に言うと、火事のこと、忘れてしまったんだと思うの。……本当にごめんなさい、園田くんの前でこんなこと言うのは失礼なんだけど、本当にわたし、あの火事が……怖くて。菜々香に『火事はわたしのせいだ』って言われたの。火事の前日に、園田くんちに行って火を使ったのはわたしだけだから、わたしが出火の原因だって。わたし、もうどうすればいいか分からなかった。謝りたいけど、謝りたいけど、園田くんに話す勇気もなくて火事のことと思うとパニックになって」

園田

「そんな。播川さんのせいじゃないって(言ったじゃないか)」

さくら

「言ってくれたけど、菜々香が、菜々香が」

園田

「三郷さんが？」

さくら

「それは園田くんの優しさだ、って。嘘だって」

園田

「違う(違う)」

さくら

「わたしもう本当に……ごめんなさい」

園田

「……おれの方こそ、ごめんなさい。おれがきっちり伝えておくべきでした。おれも、中途半端に『播川さんのせいじゃない』なんて気休めみたいに言ってしまったばかりに、播川さんを困らせてしまっ」

さくら

「……」

園田

「実は火事が起きた1か月後くらいに……そのときは、おれはもう北海道に移っていたんだけど、火事の原因が分かったんだよ」

さくら

「え……」

園田

「本当の原因。トラッキング現象、って知ってる？」

さくら

「(少し考え) 知らない」

園田

「(頷いて) おれの家、結構ボロくて、冷蔵庫のコンセントに埃が溜まっていたらしい。コンセントが少し抜けてて、埃に通電して、発火して、それで、火事になったんだって」

さくら

「え……それじゃ……」

園田

「(頷いて) 間違いなく、播川さんのせいじゃなかったんだよ」

さくら、呆然。

園田

「(俯きながら) もっと早く、伝えていればよかった」

さくら

「……………(園田を見つめる)」

園田

「どうした……の？」

さくら

「ケータイ」

園田

「え？」

さくら

「ケータイ、持ってる？」

園田

「え……？ う、うん。持ってるよ」

と言ってケータイを出す。

さくら 「菜々香は、ケータイ、持ってるかな」

園田 「……さすがに持っているんじゃないかな。この年だし」

さくら 「そっか。そうだよね」

園田 「たぶん」

さくら、勢いよく立ち上がり

さくら 「菜々香と話がしたい」

L、変化をする。

園田、さくら、ハケる。

スーツ姿の菜々香が入ってくる。

### ○4年ぶりな3人(大1)

S、ケータイの呼び出し音

菜々香、鞆からケータイを取り出し、開く。

知らない番号からなので、訝しむ。

菜々香 「……」

菜々香、電話に出る。

S、止まる。

菜々香 「もしもし……？ え、さくら……さくら？ 久しぶりだね。そう、美樹から。

いきなり来るからびっくりしちやった。……え？」

L、変化をする。

園田、さくら、入ってくる。

菜々香、園田、さくらが中央机に集まる。

3人 「お久しぶり」

V 『2011年5月3日(火/祝)』

3人、中央机の周囲にイスを出して座る。

さ・園 「ごめんなさい」

園田とさくらは菜々香に、菜々香は園田とさくらの中間に向かって頭を下げる。しばらくして、菜々香がゆっくり頭を上げる。

菜々香 「え」

園田

「おれが軽率な発言をしていなければ、三郷さんにも播川さんにも心配かけることはなかったんだと思います。火事の原因が分かったときも、いち早く播川さんに連絡していれば……」

さくら

「わたしも、あのときはホントにごめんなさい。園田さんと菜々香が付き合い始めたときに、わたし、悔しくて焦っちゃって、どうしても見返してやりたくなってしまったの。菜々香に黙って園田くんのお邪魔して、そういうわたしの身勝手な行為で、園田くんにも菜々香にも余計な心配かけたり悲しい思いさせてしまったりして、ごめんなさい」

菜々香は黙っている。

園田とさくら、菜々香を見る。

菜々香

「さくら……あたしき、中学のとき、あんたのこと嫌いだった」

さくら

「え」

菜々香

「かもしれない。まあ、今思えばだけど」

さくら

「菜々香」

菜々香

「ねえ、せっかく呼んでくれたのに申し訳ないのだけれど」

さくら

「……？」

菜々香

「もうそういう建前とかいいからさ、本音で話してよ？」

園田

「三郷さん？」

さくら

「どうしたの、わたし、本音だよ。本当にごめん、って思ってる（んだよ）」

菜々香

「だからあ！ そういうのがもういいんだって！ もう4年も経ってるんだよ、あの事件から。それなのにまだ建前建前建前？ あたしは、もう許したいんだよあんたのこと。でも、本音話してくんなきや、許すも何もできないじゃん！ 何？ あたしはもう、あんたのことを許させてももらえないの？」

さくら

「ちよっと、何言ってるか分からないよ」

菜々香

「じゃあ言わせてもらおうけどさ！ 悔しかったよ、あたしは！ さくらの家はお金持ち、かわいい、上品、料理もうまいし、おしゃれ。あたしは？ 家も普通、気立てもよくない、料理だって得意じゃない。普通、普通、普通。たまたま近所に住んでて小学校から同じだったから友達だったけどさ、あの頃のあたしは、劣等感感じてた。で、中3、園田くんと同じクラスになった。あたしは園田くんのことを好きになった。でも、さくらも、好きだったんだよね、園田



くんのこと。さくらから園田くんの話題が出たことなんて一度もなかったのに。3年間園田くんと一緒だった、可愛い、いい子のさくら。それに引き換え、中3で初めて一緒になったあたし。何もかも普通のあたし。ああ、もうダメだ。あたしはやっぱりさくらには勝てない。また勝てない。また負ける。恋愛でもそうだったんだ。盗られちゃう、盗られちゃう、盗られちゃう……園田くんをきつと盗られちゃう。普通普通普通の私が、さくらと同じ人を好きになってしまっうなんて、なんて皮肉！」

S、電車の発車間際のベル（「ドアが閉まります」）

## ○地下鉄

さくら、園田、立ち上がる。

L、変化をする。

園田 「恋愛とか、好きとかさ、よく分からないよそういうの！」

菜々香 「だからあたしは、希望を捨てなかった！」

さくら 「恋愛に興味がないのなら、可愛くて気立って良くて家庭的な、というさくらのステータスには見向きもしないかもしれない！」

菜々香 「さくらに勝ちたい、さくらに勝ちたい、さくらを見返してやりたい！」

園田 「もう好きかどうかも分からなかった、付き合えさえすれば、それでいい」

さくら 「さくらに勝つためには、園田を奪うしかない。美貌、気立て、母性、裕福、その全てを備えたさくらに勝てたら、勝てたら」

菜々香 「じゃないと、あたしの自尊心が壊れちゃう。そうならば、あたしはさくらを、ずっと友達だったさくらを、ずっと憎んで生きてしまいたい」

園田 「あたしのために」

さくら 「あたしのために」

菜々香 「園田くん！」

園田 「あたしのために」

さくら 「あたしのために」

菜々香 「園田くん！」

園田 「あたしのために」

さくら 「あたしのために」

菜々香 「振りむいてよ！！ 園田くん！！」

L、激しく光る。

さくら、倒れる。

園田 「ぼく、三郷さんのことちゃんと好きになれるかどうか分からないし、付き合

つて三郷さんが楽しいかどうかなんて」

菜々香 「絶対楽しい！ 絶対好きにさせるし、何よりあたしが園田くん好き！ だから大丈夫！（？）」

園田 「……………そっか。そこまで言ってくれるなら、嬉しいな。ぼくで良ければ、よろしくお願いします（ぺこり）」

菜々香 「勝った……。あたしの執念が勝ったんだと思った」

さくら 「ぐぬぬ」

菜々香、さくらを見下す。

菜々香、園田を自分のもとへ連れてきて、ベタベタと園田に触れながら

菜々香 「いい、さくらー！ 園田くんはあたしのもの。あんたは2年間一緒だったのに、

そんなにかわいいのに、料理もできて気立てもいいのに、たった数か月しか一緒にいない超絶普通のあたしに負けたの！ どう？？ どういう気分なのよ！ え！？」

さくら 「(倒れたまま) わたし、まだ園田くんのこと諦めないから」

さくら、上半身だけ起こして、どや顔で

さくら 「ゆめゆめご油断なさらぬよう」

菜々香 「うるさいばーか！ ばーか！ ばーか！ 負け犬の遠吠え！」

さくら、ジト目を送る。

さくら 「ゆめゆめ、ご油断、ゆめゆめなさりませ、ゆめゆめ、ぬよう。ゆめゆめ、ゆめゆめ……」

菜々香、さくらの方へ歩み

菜々香 「ゆめゆめゆめゆめうるさいなあ！」

園田 「じゃあ、また明日」

菜々香 「待って(園田の方へ)」

菜々香、園田を後ろから抱きしめる。

園田 「ひっ。三郷さん？」

菜々香 「でもね、滋くん。さくらは本気だった。ふふ。あたし油断ちゃったの」

園田 「ひいい」

菜々香 「どうしてさくらをやすやすとウチに上げたの？ 料理を作ってもらったりな

園田 「んかしたの？」  
「……それは」

菜々香、園田をさくらの方へ突き放す。

園田 「わっ」

菜々香 「あたしのこと好きだった？」

園田 「え」

菜々香 「あたしのこと好きだった？」

園田 「……」

菜々香 「あたしのこと好きだった!?!」

園田 「(小声で) ぼくは初めから言ったじゃないか」

菜々香 「え? なに?」

園田 「ぼくは初めから、三郷さんのことちゃんと好きになれるかどうか分からない

つて、言ったじゃないですか!」

さくら 「(園田の腕を抱きしめながら) 都合良いよね。自分もさつき『園田くん

のこともう好きかどうか分からない、付き合えさえすればいい』とか言ってお

きながら)」

菜々香 「都合いい? よくもまあ、そんなこと、あんたが言える!」

さくら 「はあ?? なんでよ、なんでそんなこと言われないといけないの」

菜々香 「さくらの方がよっぽど自分の都合で動いてたよねえ? だから園田くんに

上がった(したんでしょ)」

さくら 「ウケび! 違うんだけど! 菜々香に隙があったんじゃない。棚に上げないで」

園田 「(一人の会話を遮って)あかさあ!! 好きだったよ! 三郷さんのことはき

つと! 好きだったと思うよ」

菜々香 「はあ? じゃあどうして(さくらをウチに上げたの?)」

園田 「三郷さんのこと好きだと、播川さんのこと家に上げちゃダメだったの?」

菜々香 「当たり前じゃん! 付き合(ってんだから)」

園田 「(さくらに) 当たり前なの?」

菜々香 「え」

さくら 「さあ? 菜々香的には、当たり前前みたいよ?」

菜々香 「え」

園田、悲しげに頷いて

園田 「ごめんなさい、三郷さん」

菜々香 「なによ……」

園田 「おれは三郷さんと『当たり前』を共有できてなかったんだね」

菜々香、驚きたじろいで

菜々香 「！……あつ、そう。だからさくらのことをウチに上げたんだ」

園田、頷く。

菜々香、笑う。

菜々香

「ふううん……あく……そうだったんだね。うん、そっか、そう。じゃあ、あれだ……きつと、いずれは別れてたね、あたしたち！ 火事がなくつても、きつと早いうちにさ」

さくらと園田、大笑い。

菜々香

「なに！？ なんで笑うの？」

さくら

「イヤだキモいキモいキモい……なに？ ここにきて自虐？ かわいいそうな自分アピール？ 卍ウケびなんだけど」

菜々香

「……」

さくら

「わたしは本当に園田くんのこと好きだったから、努力したよ！！ 料理だってそう、勉強だってした。園田くんに合わせてるように高村光太郎も田山花袋も国木田独歩も読んだ！ 園田くんのペットのことも調べた。だから、家へ上げてもらうことができた。あなたはいつたい、園田くんは何をしてあげたの??？」

さくら、園田を後ろから強く抱きしめる。

さくら

「どう？ 悔しい？」

園田

「悔しい??？」

菜々香

「悔しいよ！！ 悔しいに決まってるじゃん！！」

さくら

「悔しかったら努力すればよかったじゃん！ 普通の人が何もしないで好かれるなんて、そんなわけないでしょ！ 今さら本音吐いたって無駄に決まってるじゃん。負け犬の遠吠えはどっちよ！（高笑い）」

S、地下鉄が駅に到着する音（「ドアが開きます」）

L、元に戻る。

菜々香、俯いている。

## ○別離

園田

「悔しかったでしょ？」

菜々香 「……」

園田 「だから、さくらが火事の犯人だ、なんて言ったんだ」

菜々香 「……(座る)」

さくら 「何の確証もないのに？(園田から離れる)」

菜々香 「(小声で)それでも言わないと気が済まなかったんだと思う。なんとかして、さくらに爪痕をつけてやらないと」

さくら 「え？ なあに??？」

菜々香 「気が済まなかったんだと思う。なんとかして、さくらに爪痕をつけてやらな

いと！ だから、『あんたが火事を起こしたんだ』って。……出火場所がキツチンらしいってことは、美樹から聞いてたからね」

園田 「でもそれが、結構な説得力を持ちちゃったよね」

菜々香、頷く。

さくら 「結果的には、わたしはそれで心を病んでしまったわけだし」

さくら、菜々香へ歩み寄る。

園田 「ねえ、三郷さん。その選択は、正しかった？」

菜々香 「……なに??？」

園田 「さくらを陥れた、その選択」

菜々香 「(顔を背けて)……知らないよ」

間

園田 「(さくらに)もう行こう」

菜々香、顔を上げる。

さくら 「え」

園田 「これ以上話すこと、ないでしょ」

さくら 「うん……」

園田 「三郷さん、ごめんなさい。せっかくお呼び立てしたのに」

園田、帰ろうとする。

菜々香 「あ、そう。帰るんだ」

園田、立ち止まり

園田 「ちよっと今おれは、今日来たこと、正直後悔してるし、ムカついでる」

菜々香 「……」

「ちよっと言い過ぎ」

園田 「(遮って) 黙ってて」

さくら 「ごめん」

園田 「三郷さん」

菜々香 「……なによ」

園田

「中学生のときの三郷さんが何を考えて、どう行動したか、なんて、そんなことはどうでもいいよ、もう。子供だったわけだし。少なくともさくらは、今日きみに謝りたくて来たんだよ。昔、おれの家に通っていたことを、それなりに後悔してさ、だいぶ時間が経っちゃったけど、でも三郷さんに謝りたいって思ってたんだよ。それを……、急に本音で蒸し返して。別にいいじゃん、そんな昔のこの本音なんてさ！ 今さら話してどうなるんだよ！ おれは、おれたちは、本音なんて聞きたくて来たわけじゃないんだよ。ただ、ただ謝って、お互い許して、空白の時間を埋めたくて、もう一回仲良くなればいいなあ、……そう思ってただけなんだよ。なのに、なんでこんな、こんなことにしちゃうかなあ！ 埋まんないじゃんか空白。きみはまだ、さくらを許せずにいるんだろう？ ああの火事のとまのまま。本当に会わなけりゃ良かった。もう二度と、会うことはないと思う。それじゃ、さようなら」

園田、さくらの手を引つ張ってハケる。

さくらは、悲しそうに菜々香を見つめながら、ハケる。

さくら 「(園田に引つ張られながら) 菜々香……」

一人取り残される菜々香。

菜々香 「ワァーオ……」

M、F O

L、溶暗

S、歓声

V 『2020年7月19日(日)』

V 『菜々香 28歳 さくら 27歳 園田 27歳』

ニュースの声 「さあ、いよいよ東京オリンピック開会式まであと5日。成田空港は各

国の選手団が続々と到着し、歓迎ムード一色になっています」

## ○園田とさくらの結婚報告

明転

園田とさくらが中央機の周りに座っている。参加者名簿の確認。  
菜々香はマイクを持って端で立っている。  
菜々香は中継待機のアナウンサー。

園田 「わ、川原先生来るんだ！？ 懐かしい」

さくら 「そうなの。ありがたいよねえ」

園田 「あ、杉村さんも」

さくら 「美樹は来るよそりゃ」

園田とさくら、楽しそうに参加者名簿を見る。

園田 「あ……（表情を曇らせる）」

さくら 「（覗き見て）あ」

園田 「送ったの……？」

さくら 「ごめん……」

園田 「送んなくていいんじゃない？ って言ったのに」

さくら 「いや、でも……昔の（友達じゃない）」

園田 「（少し皮肉っぽく）義理堅いんだね」

さくら 「そんなんじや。……ごめん」

園田 「なに？ 罪悪感？」

さくら 「そういうのじゃないよ」

園田 「ふうん、ならいいけど」

さくら 「でもさ、せっかくなんだから来てくれたらまたね、こう、ほら」

園田 「来ないじゃん（名簿を指さして） 仕事の都合って」

さくら 「忙しいよね……オリンピックも近いし」

園田 「ちよつとした有名人だしね」

さくら 「うん」

園田 「残念？」

さくら 「うーん……」

園田 「まあ、来たら会場は盛り上がるだろうね」

さくら 「そうだねえ」

ハケから紙飛行機が飛んでくる。

園田とさくら、驚く。

園田 「わっ」  
さくら 「え、なに……どっから」  
園田 「わかんない」  
さくら 「ちよつと怖い……見てきてよ」  
園田 「ええええ」  
さくら 「いいから」

園田、渋々拾いに行く。

園田 「(拾って) 何だこりゃ」  
さくら 「爆弾とかじゃない？」  
園田 「なんか書いてある」  
さくら 「なんて？」  
園田 「(紙飛行機を開いて) 結婚おめでとう」

園田とさくら、見つめ合う。

さくら 「誰から？」  
園田 「さあ？」

S、タイマー。

さくら 「あ、そろそろできたんじゃない？」  
園田 「できてるかなあ」  
さくら 「見てみますか」  
園田 「見てみましょうか」

さくらと園田、机に紙飛行機を置いてハケる。

ニュースの声 「さあ、それでは開会式場の様子はどうなっているでしょうか。新国立  
競技場の、三郷さん」

菜々香 「はい、おはようございます。こちら新国立競技場、オリンピックスタジアムの現在の様子です。開会式まで5日と迫った今、誘導や行進の最終確認が行われています。そして明日にはいよいよ、実際に選手が参加してリハーサルを行います。さあ今日ですね、なんと東京オリンピック  
2020 公式マスコットの……」

暗転



